

広島3区市民連合は10月6日、結成3周年の総会と記念講演会を開き、約110人を超える人が参加しました。住民目線・山陰ネットワーク代表の福嶋浩彦さんが「市民が政治を変える」と題して記念講演されました。

「市民が政治を変える」

(住民目線・山陰ネットワーク代表の福嶋浩彦さん)

ざっくばらんな話をさせていただきます。国会議員、政党の方もおられ耳障りな話もあるかと思います。鳥取・島根には市民連合はありません。住民目線・山陰ネットワークは3年前の選挙の時にできた市民団体で、私が候補者でした。

私は高校まで米子市で過ごし筑波大へ。学生の自主的な学園祭をしたが、大学側がこれを認めず無期停学に、謝罪文を要求してきた。拒否して除籍になり、我孫子市の生協で働いた。27歳で我孫子市議になり、38歳から3期市長、同じ者が長いのはよくないので50歳でやめ、大学に。民主党政権下で大学から民間人として政府にということで消費者庁長官を2年しました。

〈市民が選挙の文化を変える〉

国政選挙に取り組む主体の一つ 政党や議員と対等に議論し選挙をつくる

市民感覚の選挙が必要！ 選挙の文化を変える

2016年、島根・鳥取が合区になり候補になりました。私がやってきたベースは地方自治です。国会議員になろうとは思ってもいなかったが、安倍政権があまりにもひどいので私にやれることがあったら、そこから逃げたら一生後悔しそうだということで引き受けました。

島根・鳥取は自民党以外勝てない、鳥取は石破さん、島根は竹下さん・青木さんの地元です。3年前は合区になったので1人区でも注目される選挙になった。やれることがあるなら、となった。勝つところではないが選挙を変えようと思った。どう変えるか、市民が選挙をする。市長選挙でもやってきたが、国政選挙でも。市民は候補者を選んで投票する、政党の方針に基づいてボランティアをする、のが市民の立ち位置だった。そうではなくて市民が中心になって選挙の主体の一つとして、政治家や政党と対等の立場で話をしてすすめる。市民が選挙をつくっていかう。そうすれば次ぎにつながるのではないかと、実現したと思います。

「自分こと化会議 in 松江」が象徴のような取り組みです。いろんな地域で市民の活動も広がっています。私は「市民」を市民社会の構成員という普遍的な意味で言っています。国民・住民と同じ意味で言っています。

市民が主体になって取り組むという意味で、住民目線の会で私が予定候補に、市民団体が予定候補を出し、それを各党が推薦する形になり、最初は野党統一候補という呼ばれ方も拒否しました。そのぐらいこだわりを持っていました。選挙の文化を変えようと考えま

した。市民の感覚で選挙ができなければ政治も市民の政治にならないと思ったからです。ですから徹底して普通の言葉で伝えていく、政策も普通の言葉で伝えていく。選挙期間中550カ所の街頭で話しました。街頭で話すことだけをした。それはとても響いた。選挙事務所には「話を聞いて入れることにした」とどんどん電話がかかってきた。短い期間で自民党の岩盤を崩すことはできなかったが、とてもよかった。

どうでもよいことだが、タスキをかけなかった。なぜタスキを掛けなかったか。カッコ悪いからです。市民感覚でああいうタスキを掛けて素敵だなあとは思わない、こんな格好はやめようと思ったから。スローガンを絶叫するとかは絶対しなかった。

何よりも「普通の市民」にメッセージをつたえる

「受け取る側を考えながら伝える想像力が今の政治には欠けている」

シールズ・奥田さんが「受け取る側を考えながら伝えていく、その想像力が今の政治には欠けている」と言っている。その通りだと思う。「安倍打倒のために総結集しよう」と言われて結集しますか。そういう言葉はやめようと言いました。政党もですが労働組合は最後、団結ガンバローをする。絶対にやめてもらいました。その集まりに支持者だけ呼んでも仕方ない。自民党に入れてきた人、迷っている人、一回話を聞いてくださいという人に呼びかけて来てほしいんです。そういう呼びかけをしたはずなのです。それなのに来た人に団結ガンバローをさせたら詐欺みたいなものじゃないですか。一つ一つ変えていこうということでやりました。普通の人に、普通の言葉で話そうということです。

憲法や安倍政治では両端で厳しく対立しているようだけど、その真ん中にいる人たちはたくさんいる。その人たちって意識が低いですか、十分考えていないんですか。無関心な人もいるけれども、決してそんなことはない。9条は素晴らしいけれども、北朝鮮や中国にどう対応するんだ、9条変えた方がいいんじゃないかとまとっている人はたくさんいる。9条は素晴らしいけれども、安倍さんは怖いけれども今のままでいいのか、いろいろ考えている人はいるんです。そういう人たちときちっと対話ができるかどうか。9条こそ平和だと念仏みたいに唱えていたって、そういう人たちとはコミュニケーションはとれません。そっちの人たちからは、こちらの意識が低いと見られている。これだけ複雑な国際状況の中で、9条こそ平和と単純思考でやっている、楽だよ、と思っている。

そういう人たちに上から視線で「あなたたちは考えていない」「安倍にだまされている」と上から視線で言ってもあざ笑われるだけです。何の響きもないでしょう。そういう人たちと心に響く対話ができるかが、私たちに問われているのだと思います。

時代の変化の中で時代に合った憲法を、それ自体は正しいと思う。ただ安倍さんが言っているのが時代に合った憲法ですか。時代に逆行していませんか。という話です。今の憲法で、教育の義務のところ、「子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ」、女、子供といっている。こんな発想でいいんですか。変えないといけないところはたくさんある。ただ安倍さんの改憲に利用されたら困るし、安倍政権のもとの改憲はダメというのは当然。

「新しい時代に新しい憲法を」ダメだと言っただけでは「単純思考の人は楽でいいね。とにかく改憲反対と言っただけでいい人は楽でいいね」と思われる。

時代にあった憲法は安倍さんが言っている憲法ですか。そういう踏み込んだ話をしていないといけないのではないかと思います。

徹底して政権批判をしても野党に投票することにはなりません。政権批判が野党への投票に結びついたのは民主党政権ができる前までです。民主党政権が全部悪いとは思いません。私たちが悪いところ、良いところを分けて見ないと、私たちの首を絞めることになると思います。

問題はたくさんありました。消費者庁長官として中から見ていましたから、問題はたくさんありました。とんでもないこともいっぱいありました。それを国民が見ました、民主党政権を一度経験しましたから単純に今の政権がダメだから野党に入れようとはなりません。野党の政権と今の政権のどっちがいいかなと比較をして入れると思う。

今の政権がどんなにダメでも野党の政権とどっちがいいか、その選択に耐えるものをきっちりやらなければいけない。参院選挙はまだブレーキを掛けようでもいいけど、次の衆院選挙は本当に選択に耐えうるものを出さないといけない。市民からも声をあげないといけない。

<2019参院選における後退と新しい芽>

鳥取・島根合区における「市民と野党の共闘」は3年前から後退

しかし素晴らしい候補者を得て、野党一本化で次の衆院選に希望をつなぐ

3年前と比較して鳥取・島根における「市民と野党の共闘」は、3年前と比較すると大きく後退した。前進したという人もいるけど大本営発表のようなことをしてはダメでしょう。3年前は無所属候補の推薦政党は6党。今回は共産党のわずか1党だけ。当然、得票数も21万から16万に減りました。得票率も減った、どこが前進か。後退したことをちゃんと見据えて何が問題だったのか、次にどうつなげていくか考えないといけない。全国的にも前進したように見られるが、6年前自民党がバカ勝ちした時と比べてはいけない。3年前と比べないと。

立憲は伸びたというけれど、立憲と国民を合わせれば大幅に減りました。30から23くらいになったのでは。旧民主ブロックという意味では大幅に減りました。確かに3分の2はかろうじて止めたかもしれない。けれども増税を掲げて政権が勝利したのは初めてです。増税を掲げると政権政党は全部負けました。安倍さんは初めて勝った、これはすごいこと。いいとは思わないが直面している現実を見ないといけない。

ではなぜ後退したのか。鳥取・島根のことで話します。3年前は野党共闘と私たちはいかなかったが、鳥取・島根の地域からつくっていった。今度は中央の合意で上から降ってきただけです。3年前は市民団体が候補者を出した。共産党は予定候補をもっていたが、市民団体が出し意見交換会をもってきた。鳥取・島根の各政党と話し合いを重ねてきた。

そういう中で中央合意もあって、結果として無所属候補を全野党が推薦したという形になった。

今回は住民目線の会は、早い段階から野党にちゃんと話し合おう、候補者を一本化するテーブルに着こうと。迫ってきて中林さんしか候補はいないのだから、中林さんで一本化できないのか、一本化しろとは言わないが、話し合いのテーブルに全政党は着かないといけないのではないかと政党に申し入れを何回もした。それに向きあってくれたのは共産党だけです。中林さんは共産党の元衆議院議員だから当然といえば当然かもしれないが向きあってくれたのは共産党だけ。

立憲や国民民主はどう言ったかという「中央で方針が決まらないと対応できない」。私たちは「それはおかしい」と徹底して言った。中央で決めなければ市民と話し合いができないのなら、市民と政党とのコミュニケーションは成り立たない。地域にいる政党がちゃんと市民と話し合わないとコミュニケーションは成り立たない。そんなことでいいのか。枝野さんは草の根民主主義、市民から政党を作っていくと言ったではないか。それと全く逆のことをやっていないかと私たちは言いました。中央で中林さん一本化でしようと思った。そうしたら立憲も国民も自主投票にしたんですよ。私は中央に従えとは本来は言わない。地方は地方で一貫しているならいいけど、最初話した時は「中央で決めないと動けない」と言っておいて、中央が決めたら「自主投票です」。何ですか、それ。ご都合主義も甚だしい。私たちには連合の顔色を見ているとしか思えなかった。連合の顔色、地方の議員が自分の支持労組の顔を見ている。

連合が悪いんじゃない、連合の顔色しか見ない政党が悪い。こうやっていこうと提起するのが政党の役割ではないか。

単に批判しているだけでは仕方ない。連合の顔色を見るのではなく、市民の顔を見るように。つまり連合より市民の意向で動かせるだけの力をつけないといけない。

市民個人と中林さんの政策協定、中央の協定書に自治を入れ

自分が共感できる項目を選び一人一人がオリジナル協定書

今回の参院選で前進したといえるところは、市民一人一人が中林さんと政策協定を結ぶ。中林さんは共産党の衆議院議員でしたが、今回は私たちの要望も入れて無所属で立候補してもらいました。中林さんは大健闘した。票数は後退したと言いましたが、構造が違いますから増えるはずがない。中林さんはとても素敵な方でした。立憲や国民は自主投票になったけれども辛うじて一本化できた。個々の自治体議員さんは応援に立ってくれ、一定の連携ができ次の総選挙に希望をつないだと思う。

中林さんと市民一人一人が中林さんと政策協定を結ぼうと言うことを広げていった。中央の市民連合が野党と結んだ13項目があります。反対ではないけど市民にそのまま訴える文章・中味ではないと思った。真ん中にいる人を意識して書かれていない。だから13項目を全部書き換えた。それに農業と地方自治を加えた。そして新たにできた年金も加

えた。そもそも農業と地方自治が入っていないことも疑問だったが、とにかく加えて15項目に整理した。15項目の中から一人一人が自分が共感できる項目を選んで、中林さん個人と協定を結ぶことにした。一人一人がオリジナルな政策協定になる。一通は中林さんに、一通は自分の手元に。時間の制約もあって数としては広がらなかったが、運動そのものへの共感はものすごくあった。一人一人の政策協定を結ぼうという集会は本当に盛り上がった。

<市民一人一人から出発する自治を！>

社会のことを自分ごと化することが大切 それが「自治」だ 市民から出発
野党共闘は一つの手段であって、私たちの前提ではない

そもそも選挙は自分の意思で投票するもの。会社に言われてとか、労働組合に言われてとか、親戚に言われてというものではない。一人一人の意志で投票するものです。団体が結んではいけないとは言わないが、基本は一人一人です。

そうやって選挙を「自分ごと化」できた時に選挙が変わるし、政治が変わる。本当は選挙だけの話ではなくて、社会のこと事態をみんなが「自分ごと化」することが大切。そこから社会を変えていくことになるのではないか。放送日本というところが使う身近なシンプルな例だが、家の冷蔵庫に牛乳が2本あって賞味期限が違っていたら、絶対に賞味期限が早く来る方から飲む。スーパーに牛乳が並んでいた時、賞味期限が先から取らない。消費者庁長官のとき取り組んだが、結局、廃棄になる。食品ロスになる。スーパーの陳列ごととは自分事ではない。それは社会のことを「自分ごと化」することになっていない。

そのフィールドは地方自治だと思う。地域をどうつくっていくか、ということ「自分ごと化」していくことが大事だ。それが「自治」、市民の自治だ。

3年前敗北したが今日から出発だ、一からやっっていこうと住民目線は提起し、やってきた。自治は、一人一人が社会のことを「自分ごと化」することから始まる。だから市民から出発する。野党共闘からは始まらない。だから住民目線の会は、野党共闘の立場には立たないことを明確にしている。市民一人一人の自治から始める。何かやらないといけない時に、参院選で安倍政権の暴走を止めないといけないときには野党と共闘することが必要だ。野党共闘は一つの手段であって、私たちの前提ではない。

安倍政権は徹底して国家目線だから、徹底して国家から出発する。それと最も徹底して対峙できるのは市民自治、市民一人一人から出発する自治をつくっていく。市民自治こそ安倍政治と、最も根本的に対峙することができると考えている。

野党共闘をするために市民連合があるとしたら、野党共闘の立場に立つことはあり得る。いろんな団体の立ち位置による。本当に社会を変えようとしたら市民からではないか。

市民と野党が結んだ13項目に「地方自治」なし

自治体をコントロールする「地方創生」への対立軸をつくれてない

市民連合と野党が結んだ13項目に「地方自治」が入っていないのは根本的な弱さだと思っている。TPPなどがあるにもかかわらず農業が入っていないのも分からない。アベノミクスはけしからんという、憲法改正はけしからんという、しかし「地方創生」をけしからんとはいわない。そこに野党の弱さがあるのではないか。「地方創生」は国が上から自治体を評価して国のメガネにかなったところに交付金を出すというやり方だから、自治体は何をしたらみんなが幸せになるかを必死で考えるというよりか、自分の市民より国の方ばかり見て、どんな計画をつくったらOKを出してくれるのか、どんなことを言ったら国が交付金を出してくれるのか、今の自治体は雪崩をうってうなっている。そこを批判せずに何を言っているのか。そういう視点がとても大事ではないかと思う。

今回の中林さんの選挙で政策協定を含め、いろんなことをした。実におもしろい選挙をやれた。今回は住民目線が全部を仕切ったわけではない。ほとんどの政党と政治家は、市民はボランティアでやるものと思っている。だから市民が決めて政党に指示すると、多くの政党・政治家はとんでもないと思いました。そこで摩擦や大げんかもたくさんあった。窓口になった民進党は「そんなんなら市民が勝手にやってくれ、政党は自分の範囲でやるから市民は勝手にやったらいい」と発言したんです。私、怒鳴り込みました。「ふざけるな、今でも候補者代わってやるから、あんたたちが候補者出せ。あんたたちが出せないから市民が候補者を引き受けたんだろう」と。

そういう中でいい広がりがたくさん生まれました。「選挙って、政治ってこういうことをやってもいいんだ。こういうこともやれるんだ」とたくさんの方が思いました。「自分たちが思うことをやってもいいんだ。言った方がいいんだ」と革命的に意識がひっくり返っていきました。「はじめて選挙をしたけどおもしろかった。これからも市民として関わっていきたい」という人がたくさんでました。

今回は住民目線がやったのではなく、一つの団体としてやりました。住民目線が候補者の車を回したときに「安倍政治がおかしいと思っているあなた、だけど野党にもまかせられないと思っているあなた、安心してください。野党が勝っても野党政権にはなりません。でも安倍を止める一票にはなります。だから中林さんに投票してください」と宣伝カーからいうんです。止まって街宣すると共産党は「比例は共産党に」という。ごちゃ混ぜでやっている。

宣伝カーの中で「安倍にお灸を据える一票を中林さんに」と言っていた。それはずーと自民党に入れていた人も、アベはおかしいと思っている人はいっぱいいる。だから「お灸を据えましょう」と言っていた。そしたら宣伝カーに乗っていた人が「お灸をすえるでは生ぬるいと思うわ。バットで殴ってやりたい」「そりゃわかるけど、ずーと自民党に入れていた人は退くかもしれませんよ。お灸をすえるぐらいだったら中林さんに入れようという人もいるかも」。こんな議論を宣伝カーの中でやっていました。こういうおもしろい選挙、ごちゃ混ぜの選挙をしたんです。こういう場合は、市民しかつくり出せないと思うんです。